

令和2年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－9号)

農林総合研究センター
令和2年7月28日調査

気象経過

< 平年対比 >

【平均気温】

- ・ 7月第4半旬は、金沢、輪島ともに低い（平年差：金沢 -0.7°C 、輪島 -1.0°C ）
- ・ 7月第5半旬は、金沢は低く、輪島は並（平年差：金沢 -1.2°C 、輪島 -0.4°C ）

【日照時間】

- ・ 7月第4半旬は、金沢は多く、輪島は並（平年比：金沢122%、輪島104%）
- ・ 7月第5半旬は、金沢、輪島ともかなり少ない（平年比：金沢29%、輪島22%）

【降水量】

- ・ 7月第4半旬は、金沢は並、輪島は少ない（平年比：金沢106%、輪島22%）
- ・ 7月第5半旬は、金沢は少なく、輪島は多い（平年比：金沢67%、輪島122%）

【1ヶ月予報】

7月23日発表の1ヶ月予報（7月25日～8月24日）では、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。その後は、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 出穂期

- ・ コシヒカリの出穂期は、加賀地域では7月25日～8月2日と、平年に比べ3日早い～並で、前年に比べ1日早い～4日遅い見込み、能登地域では7月29日～7月31日と、平年に比べ2日～7日早く、前年に比べ2～3日遅い見込み。
- ・ ひやくまん穀の出穂期は、加賀地域で8月3日～12日と近年及び前年に比べ2日～6日遅い見込み、能登地域では8月8日～10日と、近年及び前年並～2日遅い見込み。

コシヒカリ	加賀：	7月25日	～	8月2日	平年に比べ3日早い～並
	能登：	7月29日	～	7月31日	平年に比べ2日～7日程度早い
ひやくまん穀	加賀：	8月3日	～	8月12日	近年に比べ2日～6日遅い
	能登：	8月8日	～	8月10日	近年並～近年に比べ2日遅い

2. 草丈

コシヒカリの草丈は平年比102%（加賀地域101%、能登地域103%）と並。
ひやくまん穀の草丈は近年比99%（加賀地域94%、能登地域104%）と並。

3. m^2 あたり茎数

コシヒカリは、 $396\text{本}/\text{m}^2$ 、平年比101%（加賀地域100%、能登地域102%）と並になっており、既に出穂期を迎えている圃場が多いことから、穂数は平年並に確保される見込みである。

ひやくまん穀は、 $403\text{本}/\text{m}^2$ 、近年比109%（加賀地域107%、能登地域113%）と並になっており、目標穂数（ $360\text{本}/\text{m}^2$ ）は確保される見込みである。

m²当たり莖数（平年、前年）及び株当たり莖数

コシヒカリ	県平均	396本	（平年比 101%	前年比 97%）	22.2 本/株
	加賀	391本	（平年比 100%	前年比 95%）	22.0 本/株
	能登	403本	（平年比 102%	前年比 99%）	22.6 本/株
ひやくまん穀	県平均	403本	（近年比 109%	前年比 103%）	20.2 本/株
	加賀	374本	（近年比 107%	前年比 100%）	18.8 本/株
	能登	439本	（近年比 113%	前年比 108%）	22.0 本/株

【病害虫の発生状況】

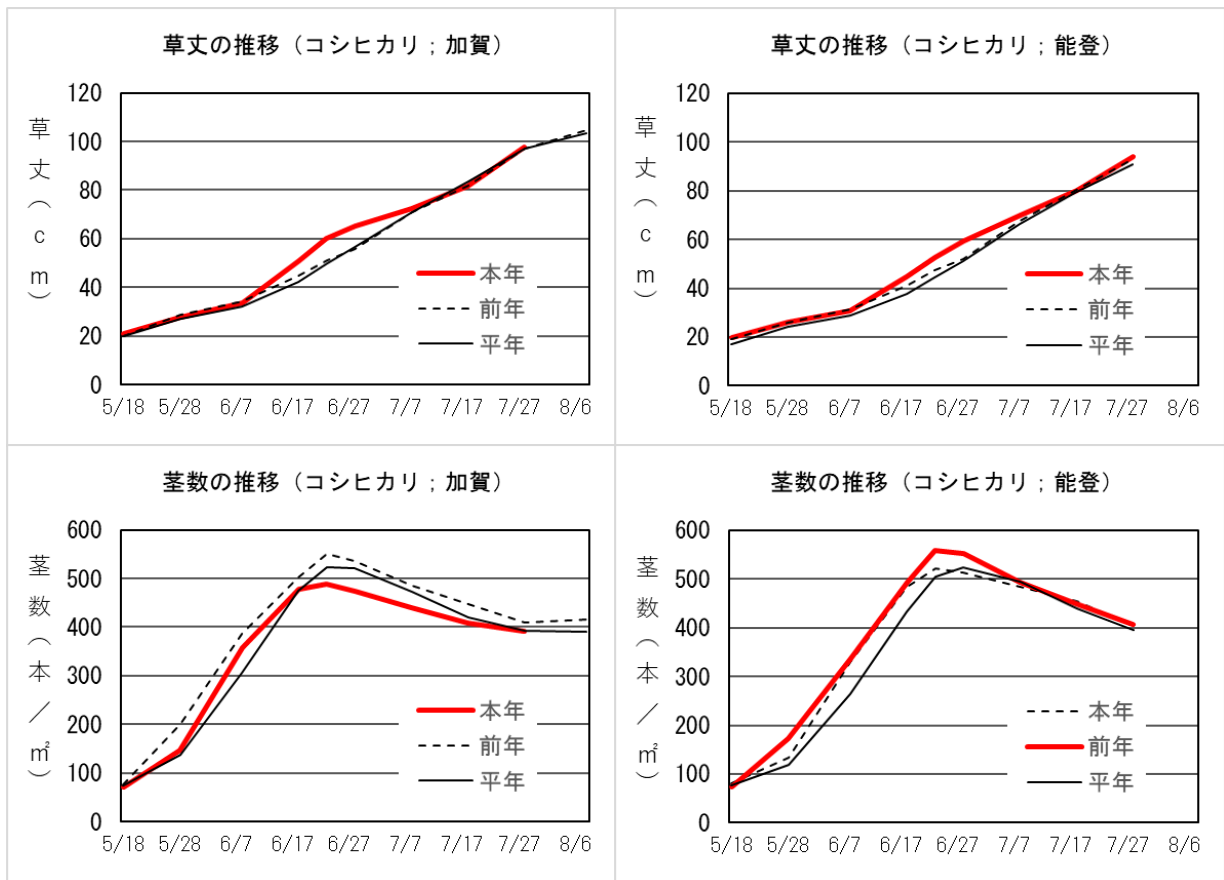
1. 7月下旬の本田侵入調査では、斑点米カメムシ類の密度が平年より多くなっている。特に、クモヘリカメムシが非常に多くなっている。
2. 葉いもちが県内各所で発生しており、拡大している。一部でずり込みも見られる。
プラスタムの感染好適日が多発している（平年の3倍、最多発年だった2003年の1.6倍）。
3. 紋枯病の発生が散見されている。
4. コブノメイガ、イナゴの被害が散見されている。

当面の対策

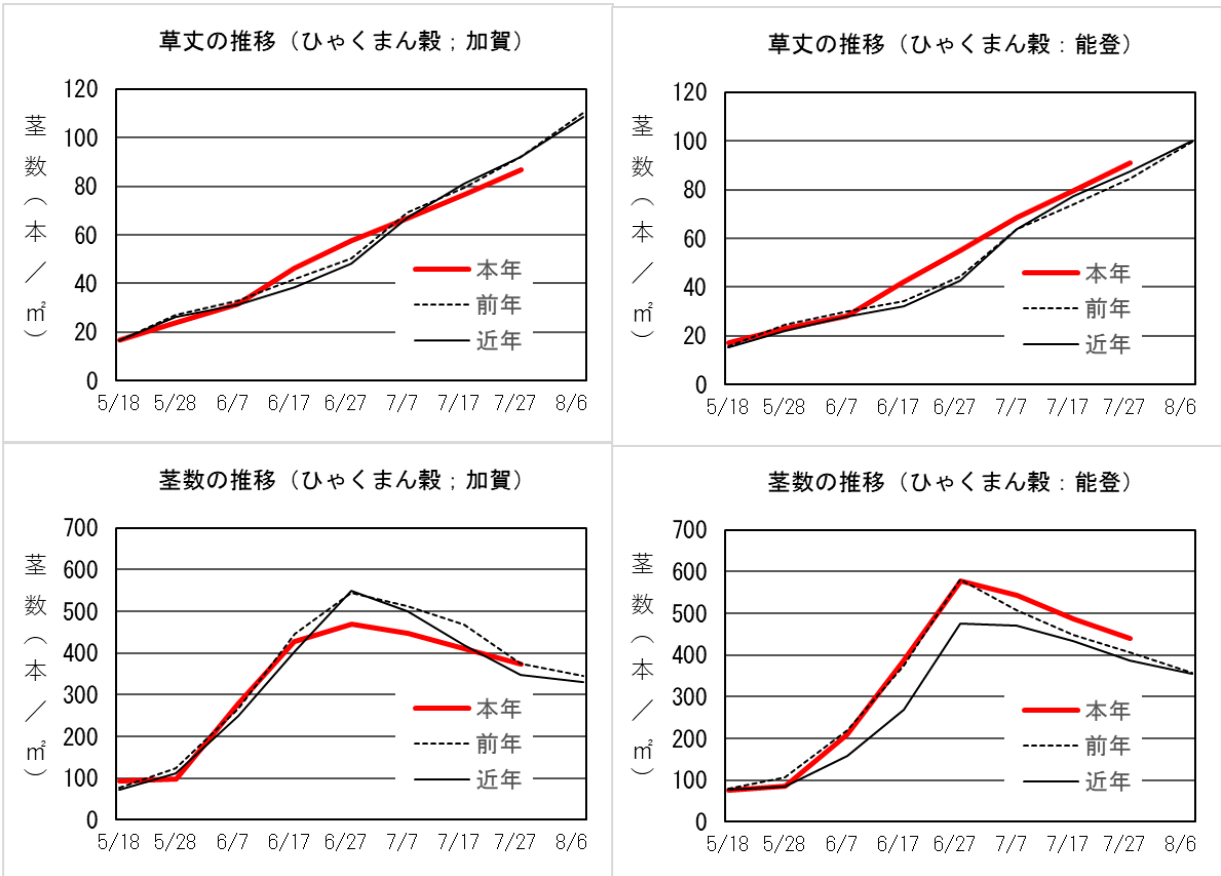
1. 斑点米カメムシ類の本田への侵入が確認されており、今後、侵入頭数がさらに多くなると予想される。斑点米の発生を防止するため**出穂7～10日後と14～17日後の2回防除を徹底**する。
今後の畦畔等の除草については、カメムシ類の本田侵入を助長するので原則行わない。但し、やむを得ず除草を行う場合は本田防除の直前に行う。
2. 葉いもちの拡大を防止するため、すでに発生している地域では圃場をよく見回り、新たに発生が認められた場合は直ちに防除を実施する。
すでに葉いもちの発生がみられることから**穂いもちへの移行が懸念されるため、出穂前後の基幹防除を徹底**する。
3. 出穂後は登熟向上を図るため、間断通水（3～4日おきに通水）による飽水管理を刈り取り3日前まで行う。
 - (1) 特に、登熟初中期（出穂後7～21日頃）に平均気温27℃以上の高温と水分不足が重なると、白未熟粒・胴割粒の発生を助長する。
 - (2) 早期に下葉が枯れ上がると株支持力が低下し倒伏を助長する。
 - (3) 高温時の長期湛水は、根の機能低下を助長するので行わない。
4. 適期収穫
 - (1) 早生品種については登熟期が低温寡日照で経過しており、未熟粒の多発が懸念される。
 - ① 籾黄化率85%から収穫を開始し、90%までに終了させる。
 - ② 登熟積算温度の目安は950℃である。
 - ③ 梅雨明け後、登熟が急激に進む場合は籾含水率（平均値）25%程度を目安に収穫する。
 - (2) 中生品種、晩生品種については今後の天候に基づいて刈取適期を判断する。
 - ① 低温寡日照又は平年並の気温・日照の場合は、籾黄化率85%から収穫を開始し、90%までに終了させる。
 - ② 高温、多日照となった場合は籾黄化率80%で刈取を開始し、90%までに終了させる。
 - (3) 共乾施設においては中生・晩生品種の胴割粒の発生を防ぎ、刈遅れにならない運用計画を作成する。

<参考：コシヒカリ、ひやくまん穀の地域別草丈および茎数の推移>

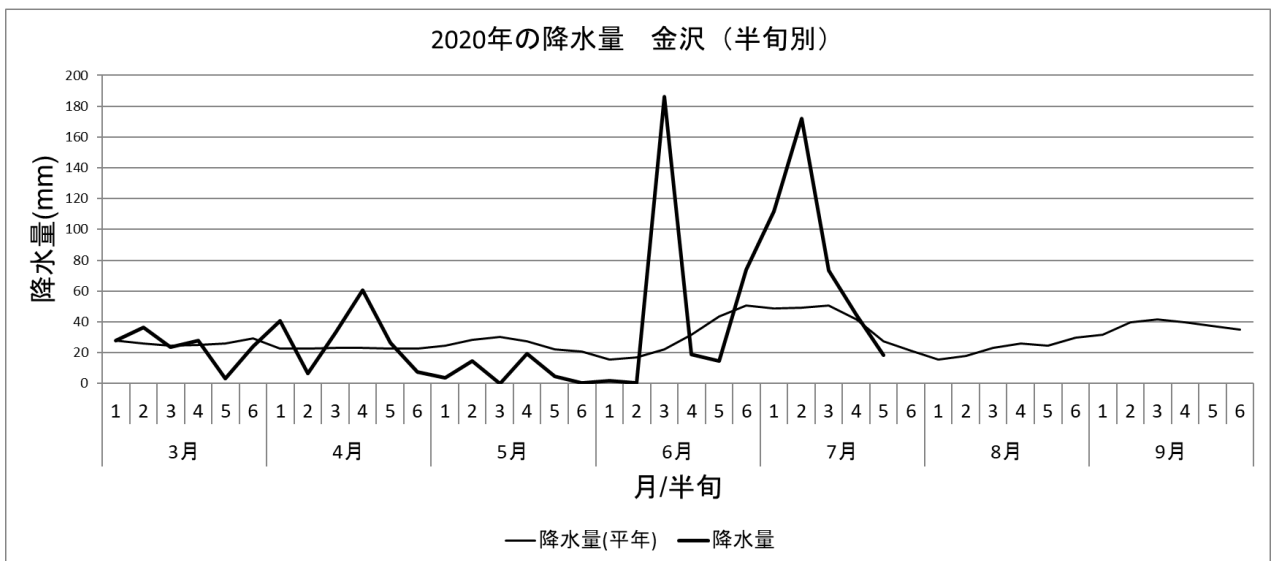
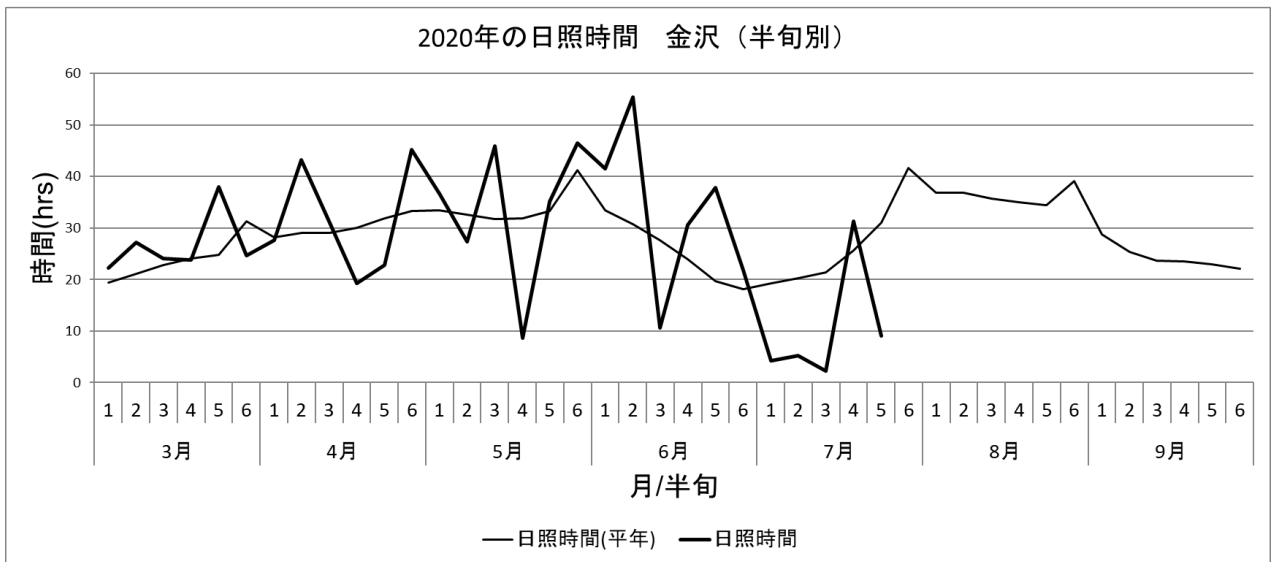
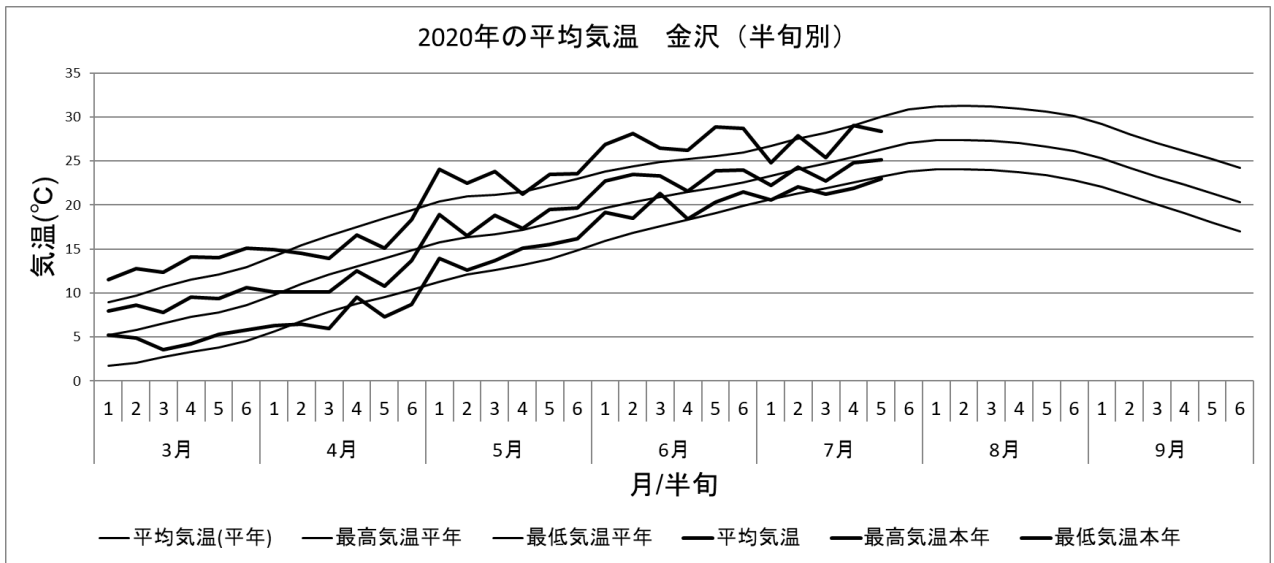
- ・コシヒカリの草丈は加賀地域、能登地域とも平年及び前年並となっている。
- ・コシヒカリの茎数は加賀地域、能登地域とも平年及び前年並となっており、穂数は平年および前年並に確保される見込である。



- ・ひやくまん穀の草丈は加賀地域は近年に比べやや短く前年並、能登地域は近年並で前年に比べやや長くなっている。
- ・ひやくまん穀の茎数は加賀地域で近年及び前年並、能登地域で近年並で前年に比べやや多くなっている。6月中旬までに茎数360本/m²を確保できており、目標穂数(360本/m²)を確保できる見込みである。



気象経過イメージ（金沢気象台）



気象経過イメージ（金沢気象台）

